

R.Browning の *The Pied Piper of Hamelin* について

野 口 忠 男

目 次

- I はじめに
- II 成立の背景
- III 原典の問題
 - 1 ドイツの資料
 - 2 英国の資料
- IV R.Browning と父親の作品との比較
- V 『ハメルンの笛吹き』の楽園のイメージ
- VI おわりに

I はじめに

不思議な魅力をもつ『ハメルンの笛吹き』伝説は、ドイツのハメルンの町で起きたとされる事件に由来し、ドイツでは Goethe (1749-1832) によって歌われ⁽¹⁾、グリム兄弟が集めた『ドイツ伝説集』⁽²⁾ (1816年) に収録されている。英国へ伝えられ、『マザー・グース』⁽³⁾ にも登場し、Browning 父子の詩だけでなく、Jacobs (1854-1916) の『続イギリス昔話集』⁽⁴⁾ (1894年) に収録されている。詩人 R. Browning がこの詩を執筆するに到った動機と影響を受けたと思われる作品について、出来る限り資料を駆使して考えてみたい。さらに Browning の父親の書いた詩『ハメルン』⁽⁵⁾ と Browning の『ハメルンの笛吹き』を語彙、イメージ、思想、物語の描き方に注意を払いながら比較し、Browning のこの作品の持つ特徴と意義について見てみたい。

II 成立の背景

Browning は、1881年に Furnivall に *The Pied Piper of Hamelin* 『ハメルンの笛吹き』を執筆した経緯について説明した。

The “W. M. the younger” was poor William Macready’s eldest son—dead, a few years ago. He had a talent for drawing, and asked me to give him some little thing to illustrate; so I made a bit of a poem out of an old account of the death of the pope’s legate at the Council of Trent—which he made such clever drawings for, that I tried a more picturesque subject, the Piper. I still posses the half dozen of the designs he gave me.⁽⁶⁾

この「W. M. 少年」は、亡ウイリアム・マクリーディの長男で、数年前に亡くなった。彼には絵の才能があり、私に絵が描けるような小品を書いてほしいと言った。そこで私は、トレント会議の時に法王代理が死亡する昔話から一片の詩を書いた。——彼はそれにとっても素晴らしい絵を描いたので、私はさらに絵に向く主題の笛吹きを書いてみた。私は今でも彼が与えてくれた6枚の素描を持っている。

この亡き William Macready (1793-1873) とは、当代随一の悲劇俳優であり、Browning は彼の要請を受けて作品を書いた。Browning 25歳の時、彼は悲劇 *Stafford* 『ストラフォード』(1837) を書き、Macready が自分の監督していた Covent Garden Theatre で上演して、自ら主役を演じた程の仲であった。この作品は不評に終わったけれども、詩人はこれからしばらくの間劇作に集中し、7篇の詩劇を書いた。1843年の *A Blot in the 'Scutcheon* 『家名の汚れ』の上演に関して、彼は Macready と意見衝突を起し、それ以後は劇壇からすっかり縁を切ってしまった⁽⁷⁾。このように Browning は名優 Macready としばらくの間親しい関係を保持していたために、彼の長男 William Macready を知るに到ったのである。Browning が風邪のために長く病の床にいた少年を見舞った折に、彼は絵の描けるような詩を依頼したのである。

R. Browning の *The Pied Piper of Hamelin* について

1921年9月15日の *The Times Literary Supplement* に C. Elkin Mathews によって出版されたこの少年の Browning に当てた2通の手紙を読む時、詩人と少年の経緯がよく理解される。一通目の手紙は、1841年の春に書いたと推測される日付のないものである。

My dear Mr. Browning,

I was very much obliged to you for your kind letter. I like exceedingly the Cardinal and the dog. I have tried to illustrate the poem, and I hope you will like my attempt. I cannot go to school because my cough is so bad. I remain your affectionate friend.

W. C. MACREADY⁽⁸⁾

親愛なるブラウニング様

ご親切なお手紙本当に有り難うございました。私はとても『枢機卿と犬』が気に入りました。この詩の絵を描いてみました。それが気に入っていただけたらと思います。咳がとてもひどいために学校へは行けません。

敬具

W. C. マクリーディ

少年の2通目の手紙は、1842年5月18日付になっているものであり、彼が『まだらの笛吹き』の絵を描き終えたことを伝えている。

My dear Mr. Browning,

I have finished the rest of the illustration [sic] of the Pied Piper which I hope you will like as well as the others but I am sorry to say I do not think them so good as the Council chamber, or the other one that I did. Hoping that they will be as great a success as others. I remain your affectionate friend.

WILLIAM C. MACREADY JUNB.⁽⁹⁾

親愛なるブラウニング様

私は『まだらの笛吹き』の残りの絵を描き終わりました。あなたが他の絵と同じ様に気に入っていただけたらと思います。残念ですが、それらは『会議室』あるいは私が描いた他の絵ほど上出来ではないと思われます。どうかこれらの絵が他の絵と同様に良い出来ばえであってほしいものです。

敬具

ウィリアム C. マクリューディ

William 少年が描いた『枢機卿』の詩に関する絵が4枚と『まだらの笛吹き』に関する絵が3枚、Baylorに現在あるとのことである。彼は絵に強い関心があり、『まだらの笛吹き』の詩については何も語っていない。この手紙から彼がうまく描けず苦心した様子が忍ばれるとともに、Browningの好意に対して精一杯応えている子供らしさを読むことが出来る。

BrowningはWilliam少年が絵を描くために書いた詩を出版する価値はないものと思っていた。ところが彼が友人のAlfred Domettにこの詩を見せたところ、彼は大変賞賛し、Browningに次の*Bells and Pomegranates*『鈴とざくろ』第3巻に入れて発表するようにすすめた。事実『鈴とざくろ』第3巻の詩が不足していた事情もあり取り入れられて、同年1842年に期限どおり出版された。その後も*Romances*『ロマンス』(1863年)、*Dramatic Romances*『劇的ロマンス』(1868年)に加えられ、Browningの最も良く知られた詩となって今日に到っているのである。

『まだらの笛吹き』制作の年代は、Ian JackとRowena Fowlerによると1842年4月に書かれたと述べ⁽¹⁰⁾、John Pettigrewはおそらく1842年の5月の上旬あるいは4月の下旬に書かれたとしている⁽¹¹⁾。DeVaneの見解もPettigrewと同じ時期を推定している⁽¹²⁾。

Ⅲ 原典の問題

1 ドイツの史料

Browningの*The Pied Piper of Hamelin*『ハメルンの笛吹き』の原

典の問題を考えて行くと、原話の変遷過程を辿る必要性が生じて来る。そこでこの伝説がいかにドイツのハメルンの町で生まれ、長い伝承を経て英国に伝えられ、Browning の作品に結実していったのかについて考えてみたい。

阿部謹也氏の『ハーメルンの笛吹き男』によると、最も古い記録は1300年頃に溯るもので、笛吹き男と子供たちの失踪を主題としたハメルンのマルクト教会のガラス絵とそれに添えられた説明文である⁽¹³⁾。次の史料は、1384年頃のハメルンのミサ書『パッシオナーレ』のタイトルページに書かれたラテン語の詩である⁽¹⁴⁾。三番目の史料は、1430～50年頃に書かれたリュエネブルクの手書本である⁽¹⁵⁾。私達はこれらの中世の三史料から、笛吹き男と子供たちの失踪に関する物語の基本的な骨格を捕える事が出来る。「1284年、ヨハネとパウロの日にハメルン市で、130人の子供が男に連れられて山に入って行き消え失せた」話が、この伝説の原型である。この伝説の基本原型には、何の飾り気もない単純素朴な事実の報告が述べられている。しかしこれもそれぞれの時代や人間の根源的な願望を取り入れ、基本原型を修正し潤色し豊かに創造しながら、より完成された物語へと発展して行くのである。

ルネサンス以降の史料に於いて大きな特徴は、〈笛吹き男と子供たちの失踪〉の伝説に〈ねずみとねずみ捕り男〉の伝説がつけ加えられて来ることである。〈笛吹き男伝説〉に〈ねずみ捕り伝説〉が、初めて登場するのが1565年の『チンメルン伯年代記』である。子供たちの失踪の原因が、ねずみ捕り男の報酬を拒否されたための復讐として説明されている。そのために物語に原因—結果の論理的な整合性が形成されることになる。ねずみ捕り男がこの伝説の主役として登場し、不思議な笛を吹き鳴らしねずみを退治し子供たちを失踪させる物語形式が以後伝承されることになる。

ここで再び鼠の問題にぶつかったので、昔と同じような方法でヴェストファーレンのハーメルン市で鼠が駆除された時の神の奇蹟について語らねばならない。その奇異な点でも記憶の特異さにおいても語るに値する話だからである。しかもその話から、全能の神がその被造物に対して「人間の理性をもってしては解明しえない」奇蹟を行なって

いることがよみとれるであろう。

何百年か前、ヴェストファーレンのハーメルン市の住民は無数の鼠の大群に襲われ、このうえなく煩わしく、苦しい状態に追い込まれていた。そこに偶然、あるいはおそらく神の配剤として他処の見知らぬ男あるいは放浪者^{ラントフーラー}が現われた。この頃ドイツでは放浪学生のことをそう呼んでいたのである。男は市民の苦しみや呪詛の言葉を聞き、市民が報酬を払い、望むなら鼠の被害から助けてあげようと申し出た。男の申し出は大変喜ばれ、何百グルデンかのかかなりの額の報酬を支払うことが約束された。そこで男は町のあらゆる小路で笛を口にあてて吹いて歩いた。やがて町中の鼠が家々から先を争って走り出て男の周りに集まり、信じられないほどの数となってそのあとをついていった。そこで男は鼠の群を近くの山に追放した。それ以後一匹の鼠の痕跡も町にはみられなかった。かくして男は市民と約束した金を要請した。しかし市民はそれを拒絶し、次のように答えた。たしかに約束には反することだが、市民の考えでは男が何の努力も払わず、費用もかけなかったにもかかわらず、鼠の大群は姿を消した。男はこれとって何も仕事をせず、また何ら特別の技術を用いたわけでもない。だから男はこれほどの大金を請求すべきではなく、僅かの金で満足すべきだ、というのである。しかし男は要求を撤回せず、約束した額の金を頑強に請求しつづけた。そこで男がいうには、支払わないなら市民は皆後悔することになるだろうし、そうなるからではもう取り返しがつかないだろう、そして自分の請求通りに支払えばよかったと思うだろうと。市民はしかし金額が大きすぎると言いつづけ、支払わなかった。男は金が支払われる見込みがないとみると、再び前と同じように笛を吹いて町中を歩いた。すると町中の八、九歳以下の少年少女たちが全員男のあとをついて近くの山まで歩いていった。山は奇蹟の如くに子供らを迎えて開き、男は誰にも知られずに子供らとともに山の中に消えてしまった。山は再び閉じられ、それ以後男と子供たちの姿はどこにもみられなかった。こうして町には筆舌にはつくしがたいほどの苦痛が与えられた。しかし市民にはどうすることも出来ず、ただ全能の神に祈り、おのが罪を認めるしかなかった。この奇蹟を永遠に伝えるために、市はすべての文書にキリスト生誕以後の日付を書きとめると

同時に、子供らの失踪から何年というふう⁽¹⁶⁾に書き加えている。

2 英国の資料

次に私達は、Browning の作品に直接あるいは間接に影響を与えたと
思われる英国の史料を考えてみたい。

Browning の話に最もよく似ていると言われているものは、Richard
Verstegen の *Restitution of Decayed Intelligence* (Antwerp, 1605) 『朽
ちた知性の回復』である。Verstegen のこの本は、1565年の『チンメル
ソンの年代記』から数えて80年後に当り、話は詳しく正確に英国に伝えら
れている。『チンメルソ年代記』と比較し、さらに Browning の詩との
関連性を見るために Verstegen からの直接の引用を全て載せておきた
い。

And now hath one digression drawne on another, for being
by reason of speaking of these Saxons of *Transilvania*, put in
mind of a most true and marvelous strange accident that hapned
in *Saxonie* not manie ages past, I cannot omit for the
strangenesse thereof briefly here by the way to set it downe.
There came into the town of *Hamel* in the countrie of *Brunswicke*
an old kind of companion, who for the fantastickall coate which he
wore being wrought with sundrie colours, was called the pide
Piper; for a Piper he was, besides his other qualities. This fellow
forsooth offered the townemen for a certaine somme of money
to rid the towne of all the rats that were in it (for at that time
the Burgers were with that vermine greatly annoyed). The ac-
cord in fine being made; the pide Piper with a shrill pipe went
piping through the streets, and forthwith the rats came all run-
ning out of the houses in great numbers after him; all which hee
led into the river of *Weaser* and therein drowned them. This
done, and no one rat more perceived to bee left in the towne; he
afterward came to demand his reward according to his bargaine,
but being told that the bargain was not made with him in good

earnest, to wit, with an opinion that ever he could bee able to doe such a feat; they cared not what they accorded unto, when they imagined it could never bee deserved, and so never to be demanded: but nevertheless seeing he had done such an unlikely thing indeed, they were content to give him a good reward; and so offered him far lesse then he lookt for: but hee therewith discontented, said he would have his full recompense according to his bargain, but they utterly denying to give it him, he threatened them with revenge; they bade him doe his worst, whereupon he betakes him againe to his pipe, and going through the streets as before, was followed of a number of boyes out at one of the gates of the Citie, and comming to a little hill, there opened in the side thereof a wid hole, into the which himselfe & all the children being in number one hundred and thirtie, did enter; and being entred, the hill closed up againe, and became as before. A boy that being lame and came somewhat lagging behind the rest, seeing this that hapned, returned presently backe and told what he had seene, foorthwith began great lamention among the Parents for their children, and men were sent out with all diligence, both by land and by water to inquire it ought could be heard of them, but with all the enquire they could possibly use, nothing more then is foresaid could of them be understood. In memorie whereof it was ordained, that from thencefoorth no Drumme, Pipe or other instrument, should be sounded in the street leading to the gate through which they passed; nor no Osterie to be there holden. And it was also established, that from that time forward in all publike writings that should bee made in that towne, after the date therein set downe of the yeare of our Lord, the date of the yeare of the going foorth of their children should bee added, the which they have accordingly ever since continued. And this great wonder hapned on the 22. day of July in the yeare of our Lord, 1376.

The occasion now why this matter came into my remembrance in speaking of *Transilvania*, was, that some do report that there are divers found among the Saxons in *Transilvania* that have like surnames unto divers of the Burgers of *Hamel*, and will thereby seeme to inferre, that this Jugler or pipe Piper, might by negromancy have transported them thither, but this carrieth litle appearance of truth; because it would have beene almost as great a wonder unto the Saxons of *Transilvania* to have had so many strange children brought among them, they knew not how, as it was to those of *Hamel* to lose them: and they could not but have kept memorie of so strange a thing; if indeed any such thing had there hapned.⁽¹⁷⁾

ところである余談をすると、別の余談が思い浮かぶものである、と言うのもトランシルヴァニアのサクソン人たちについて語ることによって、何年も前のことではなくサクソニーで起った、まことに真実味のある信じられない程奇妙な出来事が思い出されるからである。私はこの話が不思議だからと言って、ここで簡単に書き留めるわけにはいかない。ブランズウィク国のハメルンの町へ、年老いた人がやって来た。彼は色々な色で出来た奇異な上着を着ていたために、まだらの笛吹きと呼ばれた。彼は笛を吹くだけでなく、別の能力を有していた。この男は町の人々に、いくらかの金を払えば、町にいる全てのねずみを駆除すると言った。(当時バーガーの人々は、大変ねずみに悩まされていた。) 結局約束が取りかわされた。まだらの笛吹きは鋭い音色の笛を手にして町中を吹いて回った。すると直ぐにねずみが皆家々から走り出て、彼の後について来た。彼は全てのねずみをヴェーザー川へつれて行き溺れさせた。これでねずみ一びきこの町にはいなくなった。彼は後で約束したところの報酬を貰いにやって来た。ところがその約束は真面目に彼と交わしたものではないと言われた。すなわち、いつでもこのような離れ技をやろうと思えば、彼には出来ると言う考えだった。彼らは約束を気にせず、それはまったく価値のないものであり、要求される筋合いのものではないと思っていた。しかし彼が、

実際にこのような思いもよらない事をしたのにもかかわらず、彼らは彼に妥当と思える報酬を与え、彼が期待していたよりもはるかに少ない報酬を与えるだけで満足していた。ところが彼は不満をいだき、約束した十分な報酬を得たいと言った。彼らは報酬を彼に与えるのをすっかり断ってしまったので、彼は復讐してやると脅かした。彼らはどんなことでもやるならやってみろと言った。そこで彼は再び真剣に笛を吹き、前と同じように通りを進んで行くと、多くの少年たちが、彼の後について町の門の外に出て来て、小山へ向った。その山腹に大きな穴があき、その中へ彼と全ての子供たち合せて130人が入って行った。中へ入ると、小山は再び閉じて前と同じになった。足の悪い少年が、友達の後からやや遅れてやって来て、起ったことを見るとやがて戻り、目にしたことを話した。すぐに子供たちを案ずる親の間に、深い悲しみが起きた。そこで大人たちは、真剣に捜すように送り出され、子供たちの消息が聞けるかどうか尋ねてまわった。しかし可能な限りくまなく尋ねても、憶測のほかには彼らについて何もわからなかった。これを記念して、その時以来いかなる太鼓や笛あるいはその他の楽器も、子供たちが通って行った門に続く通りでは、鳴らしてはいけないし、復活祭もそこで催してはならないと言うことが制定された。さらにその時から、この町で作成される公文書はすべて、西暦で書かれた日付の後に、子供たちの失踪の日付が付け加えられるべきであると言うことが定められ、彼らはその後ずっと続けている。このとても不思議な出来事は、1376年7月22日に起った。

トランシルヴァニアについて語る時に、この出来事が思い出される理由は、ある人がハメルのパーガー人の幾人かと同じ姓の人が、トランシルヴァニアのサクソン人の中に見出されることを報告しているからである。そしてこれは奇術師あるいはまだらの笛吹きが、魔法によって子供たちをそちらへ移動させたのかも知れないと考えられる。しかしこれにはほとんど真実味が見られない。トランシルヴァニアのサクソン人たちは、多くの不思議な子供たちが彼らの中に連れて来られ大変驚いたために、彼らにも子供たちをなくしたハメルの人々と同様にわけがわからなかった。もしも何かこの種のことがそこで実際に生じたとしたならば、彼らはこの不思議な出来事を記憶に留めざるを得

なかったことだろう。

Verstegen の『朽ちた知性の回復』を『チンメルンの年代記』と比較した場合の顕著な特徴は、

- (1) 全能な神の奇蹟によるねずみ駆除の部分は描かれていない。
- (2) 年老いたまだらの笛吹きを着物や笛が詳しく表現されている。
- (3) ねずみを退治するのに、山ではなく川へつれて行き溺れさせる。
- (4) 8, 9 歳以下の少年少女ではなく、少年たちだけであり、130人と人数も明示されている。
- (5) 足の悪い少年が、目撃した話を市民に話す。
- (6) 子供たちの失踪の後、市民が全能の神に祈り、自からの罪を認めるのに反して、親たちが四方八方探しまわる。
- (7) 子供たちが通って行った門に続く通りでは、楽器の演奏も復活祭も禁じられている。
- (8) 子供たちがトランシルヴァニアのサクソン人たちの間に見い出される。

この伝説の主要な要素は、ほとんど同一であることが理解出来る。英国の史料に於いては、ねずみ捕り男、市民、子供たちが豊かに写實的に想像され、この伝説のもつ不思議な恐ろしさや怖さといった非情性が緩和されている。

出典に関する最も詳細な研究は、1926年に出た Arthur Dickson の論文である。彼は Browning と Verstegen に共通する 5 つの特徴を挙げている。⁽¹⁸⁾

- (1) 1376年7月22日としている日付。
- (2) 笛吹きに向ってどんな事でもやるならやってみろと言う挑戦の言葉。
- (3) 足の悪い少年。
- (4) 通りでは居酒屋を開くことは禁じられていると言う声明。
- (5) 子供たちがトランシルヴァニアに連れて行かれたかも知れないと言う信念を述べていること。

さらに Ian Jack と Margaret Smith は、川に名前をつけ、笛の音を

表現するのに「鋭い」と言う言葉を用いていることをつけ加えている。⁽¹⁹⁾
Browning が Verstegen を直接参照したと言う証拠はないが、Arthur Dickson の次の言葉は、傾聴する価値があるものである。

Our conclusions are that, in all probability, Browning's chief source was Verstegen, whom he knew either directly, or through a detailed retelling by his father.⁽²⁰⁾

おそらく、ブラウニングの主たる原典は、ヴァースティジェンで、直接にあるいは父親の詳しい話を通して彼のことを知っていたと言~~う~~のが我々の結論である。

Furnivall は *A Bibliography of Robert Browning* 『ロバート・ブラウニング文献』の中で、Browning はこの詩を書く前に Verstegen は読んでいなかったと述べ、彼は主として Nathaniel Wanley の *The Wonders of the Little World* (1678年) 『世にも不思議な物語』所載の伝説に拠ったと述べている。

... the poet had never seen V. before his poem was written. He got the story from North Wanley's *Wonders of the Little World*.⁽²¹⁾

詩人は彼の詩を書く前にヴァースティジェンは見ていなかった。彼はノース・ワンレイの『世にも不思議な物語』からこの話を得た。

Wanley の『世にも不思議な物語』の全文は以下の通りである。

At Hammel, a town in the Dutchy of Brunswick, in the year of Christ 1284, upon the twenty-sixth day of June, the town being grievously troubled with rats and mice, there came to them a piper, who promised , upon a certain rate, to free them from them all: it was agreed; he went from street to street, and play-

ing upon his pipe, drew after him out of the town all that kind of vermin, and then demanding his wages was denied it. Whereupon he began another tune, and there followed him one hundred and thirty boys to a hill called Koppen, situate on the north by the road, where they perished, and were never seen after. This piper was called the pied piper, because his clothes were of several colours. This story is writ, and religiously kept by them in their annals at Hammel, read in their books, and painted on their windows and churches, of which I am a witness by my own sight. Their elder magistrates, for the confirmation of the truth of this, are wont to write in conjunction, in their public books, such a year of Christ, and such a year of the transmigration of the children, &c. It is also observed in the memory of it, that in the street he passed out of, no piper is admitted to this day. The street is called Burgelosestrasse; if a bride be in that street, till she is gone out of it, there is no dancing suffered.⁽²²⁾

西暦1284年6月26日に、ブランズウィックのドイツ人の町、ハメルではねずみにひどく悩まされていた。彼らのところへ笛吹きがやって来て、ある額の金を出せば、あらゆるねずみから解放してやると約束した。それが承諾された。彼は通りから通りへと笛を吹きながら歩き、あらゆる種類のねずみを町からおびき出した。それから報酬を要求すると断られてしまった。そこで彼は別の調べを吹き始めた。すると130人の少年たちが、彼の後について北の通りに面したコペンと呼ばれる丘までやって来た。その場で彼らは消え去り、その後二度と姿は見られなかった。着ていた着物が色々な色で出来ていたので、この笛吹きはまだらの笛吹きと呼ばれた。この話は書き留められ、忠実にハメルの記録に残され、本で読まれ、彼らの家の窓や教会に描かれた。私はそれらをこの目で見ている。年老いた議員たちは、事実の印として彼らの公文書には、西暦の日付と子供たちの失踪の日付を続けて書くことにしている。これを記念するために、笛吹きが通った道をいかなる笛吹きが通ることも、今日まで禁じられている。この通りは、パー

ゲロゼストラセと呼ばれている。仮に花嫁がその通りを通ることがあれば、彼女がそこを通り抜けるまで、踊りは許されていない。

Arthur Dickson は、Browning と Wanley には共通していて、Verstegen には見られない2つの点を述べている。

- (1) 子供たちが消えうせた丘には名前（別々の名前ではある）がつけられている事実。
- (2) 笛吹きのお話が、窓や教会に描かれているという陳述⁽²³⁾。

Browning が William 少年に書き送った他の一篇「枢機卿と犬」を書いた時、Wanley の作品を参照にしたことを考えて見た場合、彼は『世にも不思議な物語』を直接参考にしたのかも知れない。

Ian Jack と Margaret Smith は Dickson に知られていなかった本として、Jeremy Collier の *The Great Historical, Geographical, Genealogical and Poetical Dictionary* (1688年) 『歴史、地理、系譜、詩歌大辞典』を取り挙げている。この本について Browning は、Furnivall に子供の頃読み通したと語り、何年も後になって父親が与えてくれたとつけ加えている。

HAMELEN, Lat. *Hamila*, a Town of *Lower Saxony* in *Germany*, under the Duke of *Hanover*. It lies properly in the Dukedom of *Brunswick*, between *Heildesheim* on the East, and *Paderborne* on the West, being 26 Miles S. of *Hamburg*, and 20 S. E. of *Bremen*, and Watered by the River *Weser*. It is famous for the wonderful Accident faid to have happened here *July 22, 1376*; for being incredibly troubled with Rats, a Musician (whom they call'd the *Py'd-Piper*) offer'd to destroy 'em for a certain Summ which was agreed upon. Then the Piper tuning his Pipes, all the Rats in the Town danced after him as he cross'd the River, and were drowned. This done, he demanded his Pay, but was denied. Whereupon striking up a new Fit of Mirth, all the Children of the Town (Male and Female) were so much charmed

R. Browning の *The Pied Piper of Hamelin* について

therewith, that they followed him to a neighbouring Hill, which opening, swallowed all up but one that lagged behind, and according to some, they were seen again in *Transilvania*. In memory of this Tragedy, it was Ordered, That in all publick Writings, after the Date of our Saviours Nativity, this of their Childrens being swallowed.⁽²¹⁾

ハメルン、ラテン語でハミイラ、ハノーヴァー公爵の統治するドイツの低サクソニーの町。そこは正確に言えば、ブルンスウィック公爵領内にあり、東のヘイルドシェイムと西のパダーボーンの間位置し、ブレーメンの南東20マイルの所に当り、ヴェーザー川が流れている。1376年7月22日にここで不思議な事件が起きたことで知られている。ねずみに大変悩まされていたので、ある楽師（人々は彼のことをまだらの笛吹きと呼んでいた）が約束した金を払えばねずみを退治すると申し出た。それから笛吹きは笛を吹きならし、彼が橋を渡ると、町の全てのねずみが彼の後から踊りながらついて来て、溺れてしまった。これが済むと彼は金を要求したが、拒否されてしまった。そこで新たな流れ出る喜びの歌を奏し始めると、町のあらゆる子供たち（男の子と女の子）はすぐに魅せられて、彼の後について近くの丘まで行った。そこが開き、一人の遅い子供を残して、全員のみ込んでしまった。ある人の話によると、彼らは再びトランシールヴァニアで見られたと言う。この悲しい出来事を記念して、すべての公文書には、救い主の誕生の日付の後に、飲み込まれた子供たちの日付をつけ加えなければならない事が命じられた。

私達が地名の綴りに注目するとき、Verstegen では、'Hamel' であり、Wanley では 'Hammel' となっていたものが、Collier では Browning に近い綴り 'Hamelen' となっている。さらに Collier は川を 'Weser' と呼んでおり、Browning と同じ綴りである。（Verstegen では 'Weaser' であり、Wanley には川の名は出ていない。）Browning が町や川の地名に関して、Collier を参照にしたことが認められるのである。

Griffin と Minchin は、*The Life of Robert Browning* 『ロバート ブ

『ラウニング伝』の中で、Browningが幼い頃父親からこの物語を語って聞かされた事について述べている。

The story, however, was familiar to him even before he had learned to read, for it was a favourite with his legend-loving father, who, devoted as he was to children, versified and illustrated the tale with pen and pencil for other small folk than those of his own family.⁽²⁵⁾

しかしながら彼は字を習う前から、この物語の事は知っていた。と言うのは、この物語は彼の伝説好きな父親が得意とするものであった。彼は子供たちを愛していたので、自分の家族以外の子たちのために、この物語を詩にしペンと鉛筆で絵を描いてあげた。

ここで重要なことは、Browningが父親を通して、幼い時からこの物語を知っていたことである。詩人の心の中にこの物語の全体像が形成され、作品として結晶する日を待っていたと思われる。

Browningが『ハメルンの笛吹き』を書く上でVerstegen, Wanley, Collier、及び父親からいかなる影響を受けていたかに関して断定する事は出来ない。しかし今まで見て来たように、幼い頃から父親の語る話に耳を傾けたり、関連する史料を直接あるいは間接に見ることによって、この作品を形成したと思われる。Browningの父親の書いた詩と比較検討してみる時、両者に共通する要素があまりにも多い事に気付き、あらためて父親の詩人に与えた影響の強さを思い知らされるのである。

Ⅳ R. Browning と父親の作品との比較

Browningの父親は、『ハメルン』の詩をほんの66行書いたところで中断し、次の様な注を書き添えている。

I began this not knowing that Robert had written on this subject—Having heard him mention it—I stopped short. I never saw

R. Browning の *The Pied Piper of Hamelin* について

his manuscript till some weeks afterwards. R. B. 2nd March.
1843. To Miss Earles.⁽²⁶⁾

私はロバートがこの主題で作品を書いていることを知らないで始めた。——彼がこのことを話すのを聞いて、私は途中で止めにした。私が彼の原稿を見たのは、3週間後のことだった。1843年3月2日。
R. B. アールズさんへ。

Browning の父親は、後になってこの詩を完成させ、それが1912年3月4日に W. R. Nicoll によって、*Bookman* に載せられた。Browning の詩と父親の詩の行数は、前者が303行、後者が346行ではほぼ同じであり、父親の詩を話の展開に添って区切って行くと Browning の各連とだいたひ符合し、用語や表現やイメージに於いても類似している箇所がかなり多く見うけられる。父親は、この物語を特に好み友人の子供たちや息子に語って聞かせたという事実からして、彼は不断語って聞かせた散文的口調で詩化したと想像されるのである。確かに父親の詩には蛇足とも言える表現が散見される。一方 Browning の詩は童詩に相応しく五官に強く訴える鮮明なイメージを駆使し、動物や人物を写實的に生き生きと印象深く描き、力強く健全な理想的思想が反映されている。次に私達は Browning の詩と父親の詩をそれぞれ対比させながら、両者の共通点と相違点を考え、最後に Browning のこの作品の中に流れている顕著な特徴を探りその意味を捕えたいと思うのである。

私達は最初に Browning の『ハメルンの笛吹き』を各連ごとに取の扱い、父親の『ハメルン』を対比させる形で論じて行きたい。

タイトル

Browning の詩では長い題がついている。THE PIED PIPER OF HAMELIN; A CHILD'S STORY. (WRITTEN FOR, AND INSCRIBED TO, W. M. THE YOUNGER.) すてに見て来たように、詩人が病床の William Macready 少年のために書き、彼に献じられた童詩である。この詩の副題の中に Browning の William 少年へのなぐさめと何らかの願いが語られていても不思議ではない。本詩の最後の数行に

語られる教訓的な表現は、それを如実に物語っている。ハメルンの魔法の笛吹き of 背後に、詩人 Browning の姿が存在し、世にも不思議な物語を語りながら、聞き手 William の心を閉ざされた悪のはびこる町から聖なる楽園へと誘う意図が隠されているのである。詩人は、いろいろな語り手の視点を盛り込みながら、劇的な手法でもって William の童心に強く訴えようとしている。この題に詩人の優しい思いやりが示されていると言える。

父親の作品は、特定の聞き手を意識してはいないけれども、子供たちに語って聞かせた経緯からして、父親の子供への願いを読み取る事が出来る。彼は笛吹きを悪魔の化身のように描き、洞窟を墓の暗く恐ろしいイメージで描写している。この描写は幼い子供たちに、不思議な人間の誘惑を避け、恐ろしく暗い場所への出入を禁ずる親の願いを語っているとも言える。次の表現には、彼の子供観が端的に表わされている。“children never should play truant” (1. 293) 「子供たちはなまけてはいけません。」

Browning が劇的な語りの手法を駆使しているのに対して、父親は連に分ける事もしないで、単調な語りの方で話を進めている。

I 連 (父親の作品の相当する行数 1～10行)

Browning はこの物語の起った町の位置と時さらに市民が悩まされた動物の害について、簡潔に描写し、物語全体への見事な導入をはかっている。一瞬のうちに私達は、物語の世界へ引き込まれ遠い昔のはるか異国のハメルンへ思いをはせる仕組になっている。特に地名と数字は、想像の世界を明確にし、一地域に集中させる点で重要な働きをなしていると言える。

父親も町の位置をまず示しているが、時は述べていない。彼の表現には簡潔さに欠け説明のくだりが多い。自からの詩的想像力に頼って描いて行くというより、“sage Antiquaries”(1. 5) 「賢明な考古学者」とか “Atlas”(1. 8) 「地図帳」を取り入れて説明する態度を示している。彼は町に満ち溢れていたものがねずみだけでなく、“the French”(1. 3) 「フランス人」も沢山いたと語り、他国民を作品の中に描き込む。父親の現実的で合理的で厳しい社会や世相の風刺眼の現われかも知れない。

II 連 (父親の作品 11~15行)

Browning はねずみに悩まされている町の様子を犬や猫や町の人々を登場させて、具体的に目に見えるように描いている。彼の対象を写実的に描写する方法が良く示され、詩人の鋭い色彩感覚や音や動作に対する細かい感性が現われている。

父親はねずみ算を行うように、数字を並べてねずみの増加を描写している。そのために苦悩している町民の緊迫感があまり伝わって来ない。彼はねずみの害だけでなく、“taxation”(1. 18)「税金」の事にも触れ、作品の視点を弱める結果になっている。

III 連 (父親の作品 16~60行)

Browning の作品中の市民たちは、団結して市役所へ押し掛け、市長と議員の怠惰と無能ぶりを激しく責め、方策を講じないと免職にすると訴える。市民が直接語る形式を取ることによって、市民の生の怒の声が、臨場感を持って迫って来るのである。これは Browning の劇的な語りの手法の好例であり、彼はこの作品に於いてこれを自在に活用している。

父親の作品では、市民たちの激烈な非難と罵りの表現は見られない。議員たちが頭をかかえ、ねずみ駆除の方法を検討する。具体策として、“Traps, poison, Terriers, Cats and Ferrets”(1. 29)「罠、毒、テリア、猫、シロイタチ」を取り上げるところは、父親の実証的で実生活の知恵を感じさせられる。

IV 連 (父親の作品 61~90行)

Browning の市長は、考えても妙案が浮かばないために何かいい手はないかと大声を上げる。Browning はここでも市長の困惑した有様を彼の口を通して直接に語る形式を用いている。そのために市長の苦悩する心の動きがそのままに表現され、彼の真実の姿を捕えることが出来る。読者は市長の無能ぶりを責めるとともに、彼に同情と共感を抱き、彼と共にねずみ駆除の問題解決に積極的に参加するように仕向けられる。詩人は扉をたたく音に驚く市長の表情を括弧でくくり、語り手が市長の心中をのぞき込む様な方法で表現し、巧みな比喻表現には語り手のユーモアに満ちた批判精神が語られている。

ここで注意しなければならないのは、Browning の場合、間に誰か人を介するのではなく、あくまで直接に人が人に語りかける形式を取っていることである。

父親は、議員たちの計画実行の様子を語り、特に猫が重視される有様を株式取引所での取引場面を用いて述べている。これは銀行員であった父親ならではの比喩表現と言えるものである。

彼は物語の証拠として三人の学者の名前を列挙している。彼は物語が単なる架空の作り話ではなく、事実に基づいた真実味のある話である事を強調しているのである。ここには、Griffin と Minchin も述べているように、“Browning’s father was an intense student or history”⁽²⁷⁾「ブラウニングの父親は熱心な歴史研究家」であることを明示していると言える。

市長と議員たちは会議を開き方策を練っている。父親は動詞を並列して簡潔な力強さで見事に表現している。“striving—contriving—pondering/ Rating—debating—musing—dreaming—/ Abusive words, and contests rising”(11. 62—4)「努力し—考案し—熟考し—計画し—評価し—議論し—黙想し—夢想する—口ぎたない言葉や論争が起こる—」。彼は入り口に配置されていた守衛が“a stranger”(1. 70)「見知らぬ人」の来訪を知られる仲介者を立てる方法を取っている。Browning の直接的な語りの方針に対して、父親の間接的な方法は笛吹きの報酬を要求する場面に於いても用いられている。父親の複雑な人間関係に対処する処世術が作品に反映しているのかも知れない。

V 連 (父親の作品 91～112行)

両者の詩を引用し比較してみたい。

“Come in!”—the Mayor cried, looking bigger:
 And in did come the strangest figure!
 His queer long coat from heel to head
 Was half of yellow and half of red,
 And he himself was tall and thin,
 With sharp blue eyes, each like a pin,

R. Browning の *The Pied Piper of Hamelin* について

And light loose hair, yet swarthy skin,
No tuft no cheek nor beard on chin,
But lips where smiles went out and in;
There was no guessing his kith and kin;
And nobody could enough admire
The tall man and his quaint attire.
Quoth one: "It's as my great-grandsire,
"Starting up at the Trump of Doom's tone,
"Had walked this way from his painted tomb-stone!"⁽²⁸⁾

Indeed, the fellow talk'd to so
Seem'd of the lowest of the low—
Let your fancy now describe
A vagrant of the gypsy tribe:
Tall gaunt and meagre: —in a dress
Which spoke the depth of wretchedness
Patches—Black, Yellow, Red & Blue, —
Rags of ev'ry shape and hue
His hungry look—his piercing eye
Close lip bent brow & stooping gait
Seem'd all conjecture to defy
About his state. —
Yet— there was in his face
Something about {above} the commonplace:
Something which gave one a surmise
Of greatness in disguise: —
The wandering jew,
For aught they knew:
 Whilst, others fancy
 'Twas *Nostradamus*
 Once so famous⁽²⁹⁾
For catching rats and necromancy—

両者とも異様な風采をした“the strangest figure”(1. 56)「不思議な男」を描く場面である。Browningは、彼の姿を赤と黄色のまだら服から描き、背たけ、やせ具合、目、髪、肌、髭、口許の順に語って行く。父親は不思議な男のことを、身分の低い者、ジブシー族のような放浪者、背たけ、やせ具合、黒、黄色、赤、青の衣服、顔つき、目、口唇、歩き振と描写して行く。二人に共通する表現やイメージを認める事が出来る箇所である。彼は背が高く、やせていて、鋭い目をしまだらの服を着ているのである。Browningも父親もこの男の異様な外見を描写することによって、不思議な男の得体の知れない超人的な人格まで暗示する写実的で象徴的な手法を駆使していると言える。

Browningは最後の数行で聖書の世界への言及“the Trump of Doom's ⁽³⁰⁾tone”(1. 68)「最後の審判の日に鳴るラッパの音」を行い、死から復活して甦るイエスの暗示として受け取れるものである。Browningは、この作品の他の箇所(11. 258-60)でも聖書への言及を行い、この作品を読む上ではなほ重要な言葉であると思われる。なぜなら不思議な男の言動には、イエスの奇蹟を行う姿が想像されるからである。ところが父親は、この男の表情に“Something about the commonplace”(1. 104)「平凡なところ」を読み、変装した姿に“greatness”(1. 106)「偉大さ」を捕え、具体的なイメージとしてねずみ捕りと占いで有名だった“Nostradamus”(1. 110)「ノストラダムス」を想像している。

二人のまだら服を着た不思議な男の異様な風貌には、少なからず道化のイメージが感じられる。高橋康也氏は『道化の文学』の中で道化の矛盾した様相を次の様に述べている。

言語的多義性にとどまらず、あらゆる矛盾した様相が「道化」の現実の姿に現われているのである。彼はときには肉体的超能力者として跳びはねるが、……ときには肉体的障害者ないし不能者として地這う。「悪党」にすりかわるほど、ずる賢い道化もいれば、頓馬な道化もある。おしゃべりであれば、ぶっきらぼうでもある。顔を白く塗ったり、黒い仮面をかぶったり、鳥の羽根を頭につけて……驢馬……の耳に鈴

R. Browning の *The Pied Piper of Hamelin* について

のついたまだらの道化服を着たりする。幸運な「魔除」にして不幸な「犠牲羊」、罪人にして無垢、人を笑う者にして人を笑わせる者。猥雑な半獣であり、無責任なおどけ者であり、辛辣な批評家である。……まことに「道化」とは「賢」なのか「愚」なのか、「狂気」なのか「正気」なのか、悪徳なのか美徳なのか、天使なのか悪魔なのか……
(31)
…。

この不思議な男には、確かに私達の合理的な識別を拒絶する、多面的な要素—求済者にして破壊者、放浪者にして楽師の面を具備している。

Ⅵ連（父親の作品 113～160行）

Browning のこの男は、世にも不思議な魔法を用いて、這うもの、泳ぐもの、飛ぶもの、走るもの、とりわけもぐら、がま、蛇、いもりを得意としている。これはBrowningのグロテスクなものへの好みを示され、男の放浪者として魔的な力が暗示されている。彼は自分の身分を自から“*The Pied Piper*”(1. 79)「まだらの笛吹き」と初めて名のるのである。父親の詩では、市長が名前を尋ねることによって、“*The Pied Piper*”(1. 124)「まだらの笛吹き」と応える対話形式を取っている。

Browning はこの異様な笛吹きが、笛を赤と黄色のスカーフの先にゆわえ、首にかけていると伝える。彼は6月にダットン国でぶよの大群を退治し、アジアでは吸血こもりを捕えた功績を披露し、まだらの笛吹きの真の力を知らせるのである。Browning の語り方には、具体例を明示して、相手を説得する論法が取られていると言える。市長や議員だけでなく、William 少年や私達読者も自然と魔法の笛の威力を受け入れ、相手の申し出を飲むように仕組まれてしまうのである。そのために、“If I can rid your town of rats/Will you give me a thousand guilders?”(11. 94-5)「町のねずみを退治したら、1000ギルダーいただけますか」と報酬の金高を自分で伝える表現法が効を奏すると言える。しかし父親は、相手側から、“Just tell us what you would be paid—”(1. 147)「いくら支払ったらよいか我々に教えてくれ」と尋ねられて初めて、笛吹きが500ポンドと応える対話形式を採用している。

Ⅶ連 (父親の作品 161~178行)

Browning では、まだらの笛吹きが町に出て笛を吹くと、大ねずみ、小ねずみ、やせねずみ、強いねずみ、茶、黒、灰色、うす黄色のねずみが、まるで人間の家族のように、飛び出て来る。Browning は、ねずみを集団として描写するのではなく、各々のねずみを描きそれぞれの個性や存在感が浮き彫りにされる形で表現している。ねずみが皆笛吹きの後を追ひ、ヴェーザー川に飛び込み溺れ死ぬ場面を比較してみたい。

From street to street he piped advancing,
And step for step they followed dancing,
Until they came to the river Weser,⁽³²⁾
Wherein all plunged and perished!

And—what a sight they saw!—
Lur'd by the magic notes, —a throng
Of rats came scampering along—
In companies some millions strong
Quitted the town. —The roads were lin'd,
Nor was one straggler left behind:
When they came to the *Weser's* bank:
Then with a general scream,
Plung'd headlong in the stream,
And sank!⁽³³⁾

Browning はねずみが溺れ死ぬ有様を、生き残った Julius Caesar (1. 123) 「ジュリエス シーザー」のような太ったねずみが、生々しい体験を直接語り、溺れ死ぬ危機的瞬間を劇的に伝える手法を用いている。父親には、Browning のような緊迫した表現は見られないけれども、Weser 川に飛び込み、溺れ死ぬ描写には、類似性が認められる。

Ⅷ連 (父親の作品 179~211行)

ねずみが駆除されたハメルンの町に、再び喜びの鐘が鳴り響き、町の

R. Browning の *The Pied Piper of Hamelin* について

人々は狂喜している。そこへまだらの笛吹きが現われ、約束の金1000ギルダーを要求する。父親の詩に於ける市民は、悪魔のねずみ退治を非難し、彼らの反対感情が高まり、市長はたまり兼ねて司教に相談する。司教は笛吹きには何も与える必要はないと語る。笛吹きは憂うつな気分扉の外に立ちじっと待っている。

Browning のハメルンの町の構造は、市民と議員と市長が形成する共同の社会である。しかし、父親の場合には、さらに教会を代表する司教が加わりより広い共同の社会である。司教が大きな権力を握り、絶対的な存在として君臨し、議会や市民に多大な影響を有していることが感じられる。しかし、まだらの笛吹きの出現は、教会の権力・議会の退廃、市民の悪徳への深い認識を求めるものであったと言えよう。

K連（父親の作品 212～232行）

Browning の市長と議員は、皆青ざめ、苦しい口実を使って支払いを拒否する。川がねずみを退治したとか約束はこちらの冗談であったと相手の心を傷つける言葉を平気で吐く。ここには問題が解決してしまうと約束を果そうとしない醜く弱い人間の心が巧妙に捕えられている。人間の心の奥底に潜む物欲への強い執着を鋭く洞察している詩人 Browning の詩精神を知る事が出来る。

父親の詩に於いては、市会議員の中から教区史員が現われ、まだらの笛吹きはその場を立ち去るべきだと主張する。彼に立ち去る意志がないならば、“stocks”(1. 229)「さらし台」や“jail”(1. 229)「牢獄」があると強迫の言葉を投げかける。父親には、人間の弱さや醜さへの洞察は弱く、むしろ権力への確信が語られ、「さらし台」や「牢獄」は悲惨な流血と死を象徴的に示している。

X連（父親の作品 233～239行）

報酬を拒絶させた笛吹きが、ひどい仕打ちのお礼に別の調べを吹くと言う。市長は起る恐ろしい悲劇について何も知らない。父親の笛吹きも、“let me play”(1. 235)「笛を吹かせてくれ」と言うだけである。笛吹きの無気味な程の平静な態度と言葉は、Browning 父子に共通していると言える。

X I 連 (父親の作品 240~244行)

Browning の侮蔑された市長は、激しく立腹し、“You threaten us, fellow? Do you worst, /Blow your pipe there till you burst!”(11. 189-190)「おどかすつもりか、お前？好きなようにするがいい、張り裂けるまで笛を吹いてみろ」と、見栄を張り自己の威信を顕示するのである。Browning は、人間の弱さだけでなく、傲慢さを描き、市長で代表されるハメルンの町での悲劇の核心を、人間の傲慢さを認めようとしない態度の中に感知していたのである。父親には、市長の台詞は見られない。笛吹きが成し遂げる驚異の話が述べられている。

X II 連 (父親の作品 245~265行)

Browning 父子に於いて同様の内容が述べられている。すなわち、まだらの笛吹きは町へ出ていき、きれいな笛の音を奏でると、男の子も、女の子も楽しい笛に魅せられ、皆こぞって、彼の後をつけて行く。しかし父親は、この魔法使いが、自分の着物の下から別の笛を取り出して吹くように話を構成している。このことによって、ねずみに聞こえる笛の音と子供たちに聞こえる笛の音を区別しているのである。

X III 連 (父親の作品 266~285行)

子供たちを飲み込む洞窟の場面は、類似性と相違性がはっきりと示されている箇所であるので両者を引用して比較してみたい。

The Mayor was dumb, and the Council stood
As if they were changed into blocks of wood,
Unable to move a step, or cry
To the children merrily skipping by,
—Could only follow with the eye
That joyous crowd at the Piper's back.
But how the Mayor was on the rack,
And the wretched Council's bosoms beat,
As the Piper turned from the High Street
To where the Weser rolled its waters

Right in the way of their sons and daughters!
However he turned from South to West,
And to Koppelberg Hill his steps addressed,
And after him the children pressed;
Great was the joy in every breast.
“He never can cross that mighty top!
“He’s forced to let the piping drop,
“And we shall see our children stop!”
When, lo, as they reached the mountain-side,
A wondrous portal opened wide,
As if a cavern was suddenly hollowed;
And the Piper advanced and the children followed,
And when all were in to the very last,
The door in the mountain-side shut fast.

He stamp’t his foot! tho’ not a word
Was spoken—Yet his victims heard. —
The loveliest children in the place,
Laughing—smiling—full of play
Dancing to the lively measure,
Following the sound with pleasure
As the piper led the way
But of a sudden—one might trace
A change in every dancers face—
Grinning ghastly—staring wild
An awful spectre every child
In that vast crowd—
Raving—shrieking—groaning, till
The dance was stopt at *Coppleburg* hill—
When lo!—a cavern opened wide
By magic malice reft—
The whole procession went inside—

—Not one was left!

The spell was now complete! Then clos'd the cave
Over them all—a sad untimely grave!⁽³³⁾—

Browning に於いては、市長も議員たちもなす術がなく茫然と子供たちを見ている。笛吹きは、Koppelberg の山を目指して進み、彼らが山腹についた時、不思議な門が大きく開いて総勢がのこらず入ると、戸はびたりと閉じた。1人足の悪い子が残され、笛吹きが見せてくれると言った“a joyous land” (l. 240)「楽しい国」について物語る。この箇所は、Browning の詩的想像力が存分に発揮された楽園の世界である。純粹無垢な子供たちが笛吹きの不思議な笛の音に誘われて、ハメルンの邪悪な大人たちの世界から逃れ、限りない夢と希望と自由と喜びに満ち溢れた楽園の世界へと達する。Browning がなぜこの楽園の世界を描写したのかについて後で述べておきたい。

Browning の描写には、無限の夢と喜びが語られているのに反して、父親の描き方には“An awful spectre” (l. 276)「恐ろしい幽霊」を見て脅える子供たちや“grave” (l. 285)「墓」のような洞窟が現われて来る。父親には、子供たちの不安や恐怖を呼び起こす悪魔性の要素が強く認められるのである。子供たちが陽気に踊りながら、山の洞窟に入る場面には、顕著な類似性が見られるのである。

XIV 連 (父親の作品 286~315行)

多くの市民の心に聖書の言葉“heaven's gate/ Opens to the rich at as easy rate/ As the needle's eye takes a camel in!” (ll. 258-60)「富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」が浮かぶ。俗悪な彼らが神の国の聖なる楽園へはいる事の難かしさと純粹な子供たちが洞窟を通り抜けることによって楽園へと達する容易さを痛感した深い認識と言える。『マタイ伝』のこの言葉は、Browning の『ハメルンの笛吹き』の解釈であり、宗教詩人としての立場を伝えていると言える。ハメルンの町はたくさんの子供たちを失い、市長は笛吹きと子供たちを限なく捜すけれども、彼らの行方はわからなかった。市長や議員たちは、子供たちの失踪の出来事を後々まで忘

れないために、法令を布告し、記念碑を建てた。正当な記録には、事件の起きた日1376年7月22日を記入しなければならなかったし、“the Pied Piper’s Street” (1. 278)「まだらの笛吹き通り」では、笛や太鼓を鳴らす者は仕事にありつけないし、茶屋でも宿屋でも音曲でさわがしてはならないと言うものであった。Transylvaniaの山国に奇妙な種族がいる件は、すでに見た Versteegen の最終箇所を思い出させる。

Browning の父親も類似したところがかかなり見られるが、布告された法に “That children never should play truant” (1. 293)「子供たちはなまけてはいけない」という子供を監視し取り締る権力者の厳しい態度が出ている。さらに “The new police” (1. 297)「新警察」によって、“rogues” (1. 298)「浮浪者」たちは、捕えられ送検され、市民の誰れもが後悔する程のひどいものであった。父親は、世相面に対して強い関心を抱き、市長、議員、裁判官、警察への風刺を表現していると言える。Browning の現実界から楽園への vertical な態度に対して、父親は現実社会への horizontal な態度を示している。

XV 連 (父親の作品をこの連に対応させることは出来ない。独立したものとして考える。316~346行)

Browning は、この詩を結ぶにあたって、William 少年に一つの教訓を語るのである。“let us keep our promise” (1. 303)「約束は守ろう」と語る。私達が約束を破れば、笛吹き男がどこからかやって来て仕返しに不思議な笛を吹き、悲しい出来事が起こる。この教訓は、William 少年だけでなく、私達に約束を守ることの意味と約束を破った後の悲しい運命を感じさせる。私達は再度『ハメルンの笛吹き男』の世界へ立ち帰り、笛吹き男の不思議な笛の音に翻弄されながら、“promise” の意味を再認識して行く。そして笛吹き男の真実の顔を知り、笛の音の誠の意味を抱える事が出来るようになる。この作品の最後で、笛吹き男が永遠に姿を消すことの意味は、“promise” が破られる時はいつでも、再び出現して来る可能性が秘められているのかも知れない。『ハメルンの笛吹き』は、一回性の物語ではなく、終りから初めへと繰り返される循環性の物語なのである。

父親は失踪した子供たちが安全無事に生活している事実を、幾度か夏

が過ぎ去った後、遠い国からやって来た旅人が語る形式を取っている。Browningのような教訓はなく、しかし旅人に語らせることによって、安定感のある終わり方をしているように思われる。Browningのように循環性をもたせると言うよりも、一回性の物語にしていると言える。

以上比較しながら二人の作品の特徴を見て来た訳であるが、Browningと父親に認められる顕著な類似点は(1) 笛吹きの様子 (2) 市長の無能ぶり (3) ヴェーザー川に溺れるねずみ (4) 洞窟の場面 (5) 失踪した子供たちがトランシルバニアで無事に生きていることが考えられる。二人の明らかな相違は、Browningに於いては、ハメルンの腐敗した市民や市長及び議員たちの閉ざされた世界に対して、洞窟を境にして明るい希望に満ちた楽園を描き出し、verticalで循環する構造を取っている事である。それに反して父親には、笛吹きを悪魔と結託する恐ろしい存在であり、彼に導かれる子供たちは墓の洞窟へと進んで行く。彼の作品には終始、恐怖と不安と死の暗く色どられた現世的で閉鎖的な世界が展開し、灰色の雲に覆われた暗いイメージが全体を占め光は射して来ないのである。Browningに認められる特徴を列挙しておきたい。

- (1) 写実的描写と象徴的描写を用い表現に明快さと深さが感じられる。
- (2) 色彩感のある言葉や他の感覚に関連する言葉を用いている。
- (3) 聖書に関する表現が見られる。
- (4) 多様な視点を用いているため語り方が直接的で劇的である。
- (5) 詩人独自の想像の世界が描かれている — 楽園の描写。
- (6) 開かれた作品構造を取り、作品に循環性をもたせている。

V 『ハメルンの笛吹き』の楽園のイメージ

それではBrowningはなぜ楽園を描いたのであろうか。ここには『ハメルンの笛吹き』をBrowning独自のものに創造した詩人の詩精神の秘密が宿されているのではないかと思われる。この時期に書かれた作品でやはり歌(音楽)の効用を扱った詩 *Pippa Passes* の Pippa の春の歌と比較してみたい。

Where waters gushed and fruit-trees grew

R. Browning の *The Pied Piper of Hamelin* について

And flowers put forth a fairer hue,
And everything was strange and new,
The sparrows were brighter than peacocks here,
And their dogs outran our fallow deer,
And honey-bees had lost their stings,
And horses were born with eagles' wings:

The year's at the spring,
And day's at the morn;
Morning's at seven;
The hill-side's dew-pearled;
The lark's on the wing;
The snail's on the thorn:
God's in his heaven—
All's right with the world!⁽³⁷⁾

清純な女工 Pippa が、朝アソロの丘を行き、家庭教師 Sebald と年若く美しい人妻 Ottima との情事にふける家の前で歌う歌である。神の愛に育まれた春の地上楽園の世界が歌われ、愛欲に溺れる二人の心中に深く食い入る歌の効果が描かれている。表現こそ異なるけれども、Browning が理想とした楽園の描写であることは間違いない。創世紀に描かれた楽園にも一脈通じる生命の横溢した園である。

川崎氏は楽園について次の様に述べている。

楽園とは、敵にしろ、害獣にしろ、苛酷すぎる自然にしろ、そのような敵対する力から、かならず隔てられ、囲われ、守られていなければならない。外側には「荒野」がある。野獣や外敵が跳梁し、寒風や酷暑が支配する。外側の空間は、広く、おそろしい。それにくらべて楽園の囲われた内側は、こぢんまりと、あたたかく、居心地よく、水豊かに溢れ、花咲き、選ばれた幸せな人びとが永遠の春を謳歌する。できればその所在すらもが、敵に知られていない土地であってほしい。すくなくとも敵が容易に到達できないほど、遠く隔たった土地である

ことが望ましい。⁽³⁶⁾

楽園とは、現実の日常生活から切り離された聖なる空間である。それは人間の心の内奥にみられる究極の美しく真実なる領域でもある。そこから生まれ来るイメージは多様な様相を呈し、静なる楽園だけでなく動なる楽園にもなり得る。Browning は、最も高揚した詩の世界に於いて、一瞬にして永遠が煌き、楽園が出現して来るのである。例えば、堅琴の音によって苦悩する Saul の魂を救済した David の神秘的体験を歌った詩 *Saul* に於いて見る事が出来る。

There were witnesses, cohorts about me, to left and to right,
Angels, powers, the unuttered, unseen, the alive —

.....
The whole earth was awakened, hell loosed with her crews;
And the stars of night beat with emotion, and tingled and shot
Out in fire the strong pain of pent knowledge.⁽³⁹⁾

David のまわりに、多数の天使や霊体、言葉では言い表せないもの、目に見えないもの、生命あるものが現われる。大地はすべて目覚め、地獄は囚人を解放し、夜空の星は感動のあまり胸おどらせ、激しく痛む閉ざされた知識を炎の中で撃ちくずしていた。あるいは音楽家 Vogler が即興演奏中に体験した、天地融合の境地に於いて現われて来る現世も楽園の一形態であると言える。

Novel splendours burst forth, grew familiar and dwelt with mine,
Not a point nor peak but found and fixed its wandering star;
Meteor-moons, balls of blaze: and the did not pale nor pine,
For earth had attained to heaven, there was no more near
nor far.⁽⁴⁰⁾

ここには新しい光彩が噴き出し、私の衝動と一つになり、輝く流星が光り、地が天に達し融合合一する世界が描き出されている。この様に

Browning の詩的精神の中核には、処女作 *Pauline*⁽⁴¹⁾ でも示されているように、墮落した閉ざされた世界から、精神の激しい苦悩を通して、一瞬にして光と愛の楽園の世界へと達するダイナミックな詩魂が宿っていたのである。

Ⅵ おわりに

Blake⁽⁴²⁾ や Wordsworth⁽⁴³⁾ は、子供の純粋な魂とともに両親や社会の諸々の悪について歌っている。E. B. Browning も、“*The Cry of the Children*” (1843) の中で、炭坑や工場で過激な労働に従い嘆き悲しむ子供たちの姿を描いている。Browning は *Pauline* 以来闇奥に監禁された清らかな魂の開放に強い関心を抱いて来たのである⁽⁴⁴⁾。彼は *Pippa Passes* に於いて社会の諸悪を浄化する純粋無垢な Pippa を創造している。『ハメルンの笛吹き』に於いて、彼はハメルンの伝説を用いながら利己愛や不正の充満している不毛の社会から、子供たちを洞窟を通り抜けて、楽園の世界へと開放することによって、子供たちが自由に活動できる楽しい子供の園を創造したと言える。ハメルンの伝説は Browning によって新しく解釈され、詩的想像力によって活力ある詩となり子供たちを闇から光へと導いてくれた。彼は子供の自由な魂の尊厳を良く知っていたのである。この作品は Christina Rossetti の *Goblin Market* (1862)、*A Nursery Rhyme Book* (1872) を経て、R. L. Stevenson の *A Child's Garden of Verses* (1885) へと引きつがれて行く子供の楽園を鮮烈なイメージで描いた金字塔と言えるものである。

〔注〕

- (1) 『ゲーテ全集』潮出版社、1979年 pp.90-91. 題名は「鼠捕り」山口四郎訳。
- (2) グリム兄弟、鍛冶哲郎訳『ドイツ民話集』人文書院、1987年 pp.283-7.
- (3) Iona and Peter Opie: *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, Oxford University Press, 1951, pp.408-9. “Tom, he was a piper's son” はドイツの伝説「ハメルンの笛吹き」の影響で書かれた

イギリスの古い物語詩 'The Friar and the Boy' 『托鉢僧と少年』を作り変えたものであらうと述べている。以下に訳を載せておく。

トムは笛吹きの子だった、
小さい時に笛をならった、
でも吹ける曲はただ一つ
「丘を越えて はるかかなたへ」。
丘を越えて はるかかなたへ、
風が私のリボンを吹き飛ばす。

トムは笛を吹き鳴らし、女の子や男の子を喜ばせた、
彼が笛を吹くと皆踊った
「丘を越えて はるかかなたへ」。
丘を越えて はるかかなたへ
風が私のリボンを吹き飛ばす。

トムが笛を巧みに吹くと
聞いた者は静かにしていられなかった。
彼が吹くと彼らは踊り始めた、
豚でさえ後ろ足で彼の後から跳ねて来た。
丘を越えて はるかかなたへ
風が私のリボンを吹きとばす。

ある日ドリィが牛の乳をしぼっていると
トムが笛を取り出し吹き始めた、
ドリィと牛は「くるくる回る」を踊った。
すると手桶が壊れ ミルクが地面にこぼれてしまった。
丘を越えて はるかかなたへ
風が私のリボンを吹き飛ばす。

彼は卵のかごを手にした Trot 婦人に会った、
彼は笛を吹き彼女は踊った、
彼女は卵が全部割れるまで踊り回った、
彼女はいらしたしたが 彼はいたずらを笑っていた。
丘を越えて はるかかなたへ

R. Browning の *The Pied Piper of Hamelin* について

風が私のリボンを吹き飛ばす。

トムはきげんの悪い男がロバをたたいているのを見た、
壺、鍋、皿、グラスの重い荷を積んでいた、
彼は笛を取り出して吹いた、
するとかわいそうなロバの荷はすぐに軽くなった。
丘を越えて はるかかなたへ
風が私のリボンを吹き飛ばす。

- (4) Joseph Jacobs, *More English Fairy Tales*, Amereon House, pp. 1-6.
- (5) *The Bookman*, May, 1912, pp. 60-70.
- (6) Thomas J. Wise, *Letters of Robert Browning*, London, 1933. p. 197.
- (7) George Rowell, *The Victorian Theatre 1792-1914*, Cambridge University Press, 1978, pp. 36-7.
- (8) *The Time Literary Supplement*, Thursday, September, 15, 1921.
- (9) Ibid.
- (10) Ian Jack and Rowena Fowler, *The Poetical Works of Robert Browning*, Volume Three, Oxford, 1988, p. 257.
- (11) John Pettigrew, *Robert Browning The Poems*, Volume One, Penguin Books, pp. 1085-6.
- (12) W. C. DeVane, *A Browning Handbook*, New York, 1955, p. 128.
- (13) 阿部謹也, 『ハーメルンの笛吹き男』平凡社, 1983, p. 22.
- (14) Ibid. p. 23.
- (15) Ibid. pp. 23-4.
- (16) Ibid. pp. 177-9.
- (17) Richard Verstegen, *Restitution of Decayed Intelligence* (Antwerp, 1605), pp. 85-7.
- (18) Arthur Dickson, *Browning's Sources for the Pied Piper of Hamelin*, *Studies in Philology*, July, 1926, xxiii, 327-36. p. 329.
- (19) Ian Jack and Rowena Fowler, *The Poetical Works of Robert Browning*, p. 260.
- (20) Arthur Dickson, *Browning's Sources for the Pied Piper of Hamelin*, *Studies in Philology*, July, 1926. p. 336.

- (21) Furnivall, *A Bibliography of Robert Browning*, 2nd. ed., 1881, pp.158-9.
- (22) Nathaniel Wanley, *The Wonders of the Little World*, London, 1806, pp.400-1.
- (23) Arthur Dickson, *Browning's Source for the Pied Piper of Hamelin*, *Studies in Philology*, July, 1926. p.330.
- (24) Jeremy Collier, *The Great Historical, Geographical, Genealogical and Poetical Dictionary*, London, 1688, Hamelenの項参照のこと。
- (25) Griffin and Minchin, *The Life of Robert Browning*, Archon Books, 1966, p.21.
- (26) Ian Jack and Rowena Fowler, *The Poetical Works of Robert Browning*, Volume Three, Oxford, 1988. p.262.
- (27) Griffin and Minchin, *The Life of Robert Browning*, Archon Books, 1966, p.17.
- (28) Robert Browning. *The Pied Piper of Hamelin*, 11. 55-69. テキストはIan Jack and Rowena Fowler, *The Poetical Works of Robert Browning*, Volume Three, Oxford, 1988を使用。
- (29) Robert Browning's father, *Hamelin*, 11. 91-112. テキストはIan Jack and Rowena Fowler, *The Poetical Works of Robert Browning*, Volume Three, Oxford, 1988を使用。

事実その男は、身分の低い者の中でも最も低い昔のように話した

—

今想像力を働かせ

ジブシー族のような放浪者を思い描いて下さい。

背が高く、やせこけ、貧弱で —

着ているものはこの上なくみじめなつぎはぎだらけ — 黒、黄色、赤、青 —

あらゆる形と色のぼろ切れの着物、

空腹そうな顔つき — 鋭い目

ゆがんだ顔の閉じた口唇、前かがみの歩きぶり

彼の姿はいかなる推測も拒むところがあるように思えた。

しかし彼の顔には

どこか平凡なところがあった。

変装のよそおいにはどこか偉大さを偲ばせるところがあった。 —

R. Browning の *The Pied Piper of Hamelin* について

ひょっとすると
さまよい歩くユダヤ人、
一方他の者は
かってねずみ捕りと占いでとても名高い
ノストラダムスのことを想像している —

- (30) 『ヨハネの黙示録』第9, 10章参照。
(31) 高橋康也, 『道化の文学』, 中公新書, 1977, p. 14.
(32) Robert Browning, *The Pied Piper of Hamelin*, 11. 199-222.
(33) Robert Browning's father, *Hamelin*, 11. 167-77.

そして何と言う光景を彼らは見たことか! —
魔法の音に誘惑されて — ねずみの群れが
はね回りながらやって来た —
群れをなして何万もの元気なねずみが町を去った — 道に並び、
一匹の落伍者も後に残らなかった。
彼らがヴェザー川の岸边に来ると、
いつも通りの金切声をあげながら、
川の流れにまっさかさまに突っ込み、
そして溺れてしまった!

- (34) Robert Browning, *The Pied Piper of Hamelin*, 11. 208-31.
(35) Robert Browning's father, *Hamelin*, 11. 266-85.

彼は足を踏み鳴らした! 一言も言わなかった —
だが犠牲者たちには聞こえた —
その場にいた最も愛しい子供たち、
笑いながら — 微笑みながら — 遊びながら
楽しい曲に合わせて踊りながら
笛吹きが先頭に立って行くと
喜んでその音について行く
ところが突然 — すべての踊り子たちの顔に
変化が読み取れた —
青ざめた顔をして歯をむき出し —
大きな群れをなすあらゆる子供たちは

狂おしそうに恐ろしい幽霊をじっと見つめ —
わめき — 悲鳴を上げ — うなり声を上げ、ついに
踊り子はコペルバークの丘で止まった —
その時見よ！ — 洞窟が大きく開いた
魔法の悪意によって —
行列が全て中へ入った —
一人も残っていなかった！
いまや呪文は完璧だった！ それから洞窟は
彼らすべて飲み込むと閉じてしまった
悲しいいまだ早過ぎる墓に！

- (36) 『マタイ伝』19章24節。
(37) Robert Browning, *Pippa Passes*, part 1, Morning, 11. 221-9.
「北星論集」(21号)(1983), 拙文「R. Browning: *Pippa Passes* に於ける innocence」参照。
(38) 川崎寿彦, 『楽園と庭』, 中公新書, 1984, p. 4.
(39) Robert Browning, *Saul*, 11. 314-20. 「北星論集」(25号)(1987), 拙文「R. Browningの宗教詩: Saul に於ける闇と光」参照。
(40) R. Browning, *Abt Vogler*, 11. 29-32 「北星論集」(20号)(1982), 拙文「R. Browning: *Abt Vogler* について」参照。
(41) I believe in God and truth And love, *Pauline*, 11. 1020-1.
(42) W. Blake, *Songs of Innocence*
(43) W. Wordsworth, *Intimations of Immortality from Recollection of Early Childhood*
(44) 『響文』Vol. 1. 第2号, 1984, 響文社, 拙文「R. ブラウニングにおける『劇的独白』」p. 9 参照